

## 文学作品の誤った読み取りの修正

—『ごんぎつね』を取り上げて—

立木 徹\*・伏見 陽児\*\*

### はじめに

文学作品の誤った読み取りとその修正について、いくつかの研究が報告されている。麻柄 (1994) は木下順二の『夕鶴』を教材としてとり上げ、文章中に示される事実を吟味させることによって、恩返し的な読み取りをある程度修正させた。他方、立木・伏見 (2003, 2004) は、文章中の事実を確認できたとしても誤った読み取りが修正されないという事実を報告している。立木・伏見 (2003, 2004) の研究について少し詳しく紹介する。ここで取り上げられた作品は、『ごんぎつね』(新美南吉作)である。これは長い間にわたり小学校4年生国語の教科書に採用されてきた名作である。あらすじは次のようなものである。

村はずれに住むごんぎつねは、ひとりぼっちの小ぎつねで、村に出てきていたずらばかりしていた。ある日ごんは、兵十のしかけた網から魚を逃がしうなぎを盗む。そのうなぎは兵十が病気の母親に食べさせようとしたものであったことを、兵十の母親が亡くなった後で知り、いたずらしたことを後悔する。そして、その償いに栗や松たけなどをこっそりと兵十の家に持って行く。ごんの行為とは知らない兵十は、家に忍び込んだごんを鉄砲で撃つ。そのとき、はじめて栗を持ってきたのがごんだと兵十は知ったのだった。

最後の場面で、兵十は「ごん、お前だったのか、いつもくりをくれたのは」と語りかける。この場面で、立木・伏見 (2003, 2004) は、「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」に対するごんの償いの気持ちが兵十に伝わったと考えるかどうかを大学生に尋ねた。すると、多くの大学生がごんの気持ちが兵十に伝わったと回答した。ごんがうなぎを盗んだために兵十の母親にそれを食べさせられなかった。確かにこのことをごんは後悔している。しかし、そのことと兵十がそれを知ることができたかどうかということは別である。兵十がそれを知ることができなかったということは、ていねいに読めばわかるはずである。それにもかかわらず、このような誤った読み取りが生じたのである。そこで、立木・伏見 (2003, 2004) は文章中の事実を確認させるための質問を行い、誤った読み取りが修正されるかどうか調べた。しかし、誤りは修正されなかった。

本研究では3つの実験を行い、上記の誤った読み取りの修正にとって有効な条件を探ることにする。

---

\*茨城キリスト教大学生生活科学部

\*\*千葉大学教育学部

## 実 験 1

### 問題と目的

事実確認による誤りの修正が有効でない理由は、ごんがくりを持ってきたことを兵十が知った最後の場面でごんの償いの気持ちに気づいた、と読者が考えたためであると考えた。この時に、なぜごんがくりを持ってきたのかと兵十が考えたとしても不思議はない。その理由をいろいろ考えた末、「うなぎを取ったことをごんが後悔して、それを償うためにくりを持ってきたにちがいない」と兵十は気づいたのではないかと、読者は思ったのであろう。もし、そうであるならば、最後の場面で「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」に対するごんの償いの気持ちに兵十が気づいたかどうかを読者に質問する（「気持ちの伝わり」質問）。そして、そのことが難しいことに読者自身が自発的に気づくようにさせる。このようなことが、誤った読み取りを修正する一つの方法になるのではないだろうか。そのような仮説に立って、ごんの後悔の気持ちに兵十が気づきにくいという解釈を選択肢として提示して、自発的に誤った読み取りを修正させることにした。多様な解釈を提示することが文学作品の読み取りに影響を与えるという事実は、立木（1992）によって既に示されている。本研究においてもその方法を採用した。

実験に先立ち予備調査を行った。ごんぎつね本文を通読後「気持ちの伝わり」質問に答えてもらい、ついで兵十は最後の場面でごんの償いの気持ちに気づいたかについて解釈課題を行う。さらに再度「気持ちの伝わり」質問に答えさせた。解釈課題の結果を分析した結果、「母親にうなぎを食べさせられなかったことに対する償い」であると兵十は思わなかった、という内容の選択肢を選んだ者の合計が50人中37人（74%）に達した。しかし、「母親にうなぎを食べさせられなかったことに対する償い」であることに兵十は気がついたと思う、という選択肢を選んだ者が9人（18%）もいた。この9人は実験者が誤りだと考えている選択肢が正しいと考えたのである。

この結果から、単に多様な解釈を示しただけでは誤った読み取りが修正されにくいと予想した。そこで、1）、2）に示す解釈課題について各自の解釈を選択した後、それを発表し意見交換を行わせるという形式の授業をすることにする。他者の異なる意見を聞くことによって自分の誤りに気づくかもしれない。もしそうならば、このような手続きは気持ちの伝わり質問に正しく答えることに對し有効であろう。この仮説を確かめることが本実験の目的である。

### 解釈課題

- 1) ごんが穴の中で考えたことが事実として確認できるか。
- 2) ごんがくりを持ってきたのは、何かの償いだと最後の場面で兵十は考えたか。

### 方 法

【対象者】茨城県内の私立 I 大学生16人。

【手続き】読み物冊子（『ごんぎつね』本文が印刷されているもの）と質問が記載されている質問冊子を被験者に配付。1回通読（実験者が音読、対象者は本文を目で追う）する。その後、気持ちの伝わり質問（事前テスト、表1）への解答、解釈課題への解答（表2）、解釈課題の解答発表と話し合い、再度気持ちの伝わり質問への解答（事後テスト、

表1 事前・事後テスト

気持ちの伝わり質問

以下の質問に答えてください。本文を参照してもかまいません。

- 問1 物語の最後の場面で、兵十が「ごんお前だったのかいつもくりをくれたのは」と言った時、ごんはうなずきました。このとき、次の(1)～(3)に示すごんの気持は兵十に伝わったと思いますか。それとも伝わらなかったと思いますか。下に示す選択肢の中からもっとも適切だと思うものを選びその記号に○をつけて下さい。(選択肢はいずれも、ア「伝わったと思う」、イ「伝わらなかったと思う」、ウ「伝わったか、伝わらなかったか判断に迷う」)
- (1) 自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかったとごんは思っている。このことに対して「いわしを持って行って償いたい」というごんの気持。
- (2) 自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかったとごんは思っている。このことに対して「くりを持って行って償いたい」というごんの気持。
- (3) 「兵十が自分と同じ一人ぼっちになってしまったなあ」というごんの気持。

表2 解釈課題

- 問1 2枚目2段7行目～20行目をご覧ください。次のような記述がなされています。これを読んで続く問に答えて下さい。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきり網を持ち出したんだ。ところが、おれがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。ちょっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。

下線を引いた文章は、ごんが穴の中で考えたことです。ごんが考えたそれぞれの内容は、実際にあった事実でしょうか。もっとも適切だと思う記号に○をつけて下さい。

- (1) 兵十のおっかあは、どこについていた。  
ア. 文章から事実であることが確認できる。  
イ. ごんの推測であって、文章から事実であるとは確認できないが、事実だと思う。  
ウ. ごんの推測であって、文章から事実であるとは確認できないし、実際事実ではないと思う。  
エ. 文章から事実と反することが確認できる。
- (2) 兵十のおっかあは、うなぎが食べたいと言った。[以下、選択肢は(1)と同様]
- (3) 兵十は、おっかあにうなぎを食べさせるためにははりきり網を持ち出した。
- (4) 兵十は、おっかあにうなぎを食べさせられなかった。
- (5) 兵十のおっかあは、うなぎを食べないまま死んだ。
- (6) 兵十のおっかあは、うなぎが食べたいと思いながら死んだ。

- 問2 ごんは兵十の家にくりを持って行きましたが、ごんがくりを持っていった理由としてアとイのどちらがより適切だと思いますか。当てはまる記号に○をつけて下さい。それ以外の理由だと思ふ人は、ウに○をつけて、その理由を( )に書いてください。

ア. 「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」への償いのため  
イ. 「うなぎを取ったいたずら」そのものに対する償いのため  
ウ. その他 ( )

- 問3 『ごんぎつね』の最後の場面に次のような記述があります。この、最後の場面について次の質問に答えてください。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目に付きしました。「おや。」と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

- (1) 自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかったとごんは思っています。その償いのために、ごんは兵十のところにいろいろなものを持って行きます。  
ごんがくりを持ってきたのは、何かの償いだとか最後の場面で兵十は考えたでしょうか。それとも考えなかったでしょうか。当てはまる記号に○をつけて下さい。  
ア. 考えたと思う      イ. 考えなかったと思う      ウ. わからない
- (2) ア「考えた」を選んだ人はお答え下さい。何の償いだと考えたでしょうか。もっとも適切だと

思う記号に○をつけて下さい。その他の意見のある人はエに書いて下さい。

ア.「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」への償いだと考えたと思う。

イ.「うなぎを取ったいたずら」そのものに対する償いだと考えたと思う。

ウ. 日頃のいたずらに対する償いだと考えたと思う。

エ. その他 ( )

オ. わからない

問4 『ごんぎつね』の最後の場面に次のような記述があります。この、最後の場面について次の質問に答えてください。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目に付きました。「おや。」と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

(1) 自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかったとごんは思っています。

その償いのために、ごんは兵十のところにいろいろなものを持って行きます。

くりを持って来た理由として、償い以外の可能性を最後の場面で兵十は考えたでしょうか。それとも考えなかったでしょうか。当てはまる記号に○をつけて下さい。

ア. 考えたと思う

イ. 考えなかったと思う

ウ. わからない

(2) ア「考えた」を選んだ人はお答え下さい。

何の償いだと考えたでしょうか。当てはまる記号すべてに○をつけて下さい。その他の意見のある人はウに書いて下さい。

ア.「自分が一人になったのでかわいそうだと思って、ごんはくりを持って来たのではないだろうか」と兵十は考えたと思う。

イ.「自分と友だちになりたかったからくりを持って来たのではないだろうか」と考えたと思う。

ウ. ア、イ以外の理由を考えた。( )

エ. わからない

表1) という順に実施する。解釈課題の実施手続きについては、まず問1から問4すべてについて各自解答する。続いて、問1(1)の解答の発表、話し合い、(2)の解答の発表、話し合いのように1問ずつ進めて行く。

## 結果と考察

解釈課題の結果(表3、表4)にもとづいて結果をまとめると以下のようになる。

1. 問1の質問について言えば、「事実だと思う」という解答(選択肢ア、イ)と「事実ではないと思う」という解答(選択肢ウ、エ)が、おおよそ半々という傾向が見られる。ごんが穴の中で考えたことは事実だ、と考えている者が予想以上に多くいる。
2. ごんがくりを持って行った理由(問2)について言えば、約半数がアを選択し「兵十が母親にうなぎを食べさせられなかったこと」への償いであると答えているが、残り半数はそれ以外の項目を選択し誤答している。正確な読みが出来ていないことを示す結果と言えるだろう。
3. 最後の場面で兵十が考えたこと(問3)について言えば、半数の8名がアを選択し何かの償いだと考えている。そのうちのただ1名が、「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」への償いだと答えている。

次に気持ちの伝わり質問の結果を見てみる。ここでは質問(1)、(2)の事前、事後テスト結果のみを示す(表5、表6)。それぞれの問で、伝わった、伝わったか、伝わらなかったか判断に迷う、伝わらなかったの順により正しい方向への反応だと考える。事前テストから事後テストにかけてより正しい方向への反応変化数とより誤った方向への反応変化数

表3 解釈課題：問1の結果

	ア	イ	ウ	エ
(1)	0	16	0	0
(2)	1	6	9	0
(3)	1	7	8	0
(4)	5	4	6	1
(5)	2	8	6	0
(6)	0	6	10	0

表4 解釈課題：問2～4の結果

	ア	イ	ウ	エ	オ
問2	8	2	6	—	—
問3(1)	8	4	4	—	—
(2)	1	5	2	0	0
問4(1)	2	8	6	—	—
(2)	1	0	0	1	—

—は該当する選択肢のない項目

表5 事前・事後テスト結果 問1(1)

		事 後			合計
		伝わった	伝わらなかった	判断に迷う	
事前	伝わった	2	0	0	2
	伝わらなかった	0	10	3	13
	判断に迷う	0	0	1	1
合 計		2	10	4	16

表6 事前・事後テスト結果 問1(2)

		事 後			合計
		伝わった	伝わらなかった	判断に迷う	
事前	伝わった	7	1	4	12
	伝わらなかった	0	2	1	3
	判断に迷う	0	1	0	1
合 計		7	4	5	16

を計算し、サインテストを行う。質問(1)では有意差が認められず、(2)では0.06となり有意傾向となった。このことから仮説は検証されなかったと言える。ただし、いずれの間でもより正しい方向への反応数が誤った方向への反応数より多かった。伝わらないという選択肢を選んだ者の数について言えば、事前テストと事後テストとではほぼ同じである。他方、伝わったという選択肢を選んだ者の数は事前テストから事後テストにかけて、(1)では2→2、(2)では12→7に減少した。それとは対照的に、判断に迷うという選択肢を選んだ者は増加している。

では、なぜ伝わらないという選択肢を選ぶ者が増加しないのだろうか。解釈課題の結果3で示したように、「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」への償いだと兵十が考えた、と答えているのはわずか1名である。このことからすれば、最後の場面でごんの償いの気持ちが兵十に伝わるはずがないと答えてもよいはずである。しかし、気持ちの伝わり質問の事後テスト結果は、表6からわかるように伝わったと答える者が7名もいる。兵十は母親にうなぎを食べさせられなかった、とごんは思って後悔している。だか

表7 解釈課題：問3(1)と事後テスト：問1(2)の相関

		事 後 問1(2)			合計
		伝わった	伝わらなかった	判断に迷う	
問3(1)	考えた	6	1	1	8
	考えない	1	1	2	4
	わからない	0	2	2	4
合 計		7	4	5	16

ら、くりを持って行って償いたいと思っている。これはごんの主観であり、その主観が兵十に伝わった読者は考えているのである。このことは解釈課題問3での反応と矛盾する。この点をさらに検討するために、解釈課題問3(1)の「ごんがくりを持ってきたのは、何かの償いだと最後の場面で兵十は考えたか」という質問の結果と、事後テスト問1(2)のごんのくりを持って行って母親に食べさせられなかったことに対して償いたい、という気持ちが伝わったかどうかの質問とのクロス集計を行った(表7)。その結果、問3(1)で考えたと答えた8名のうち6名が伝わったと答えている。兵十が最後の場面で、くりを持ってきたのが何かの償いだと考えたことと気持ちの伝わり質問との関連性を示唆する結果である。対象者は、償い＝母親に食べさせられなかったことへの償いと考えているようである。いずれにせよ、学生の誤った読み取りを修正する別の方法が必要であると考え。次の実験で新たな修正方法を試みることとする。

## 実 験 2

### 問題と目的

多様な解釈の提示と討論という方法では、誤った読み取りが改善されなかった。そこで、事実確認以外の方法を検討する。誤った読み取りが生じる一つの理由として、この作品がごんを中心とした視点から書かれている点に着目したい。ごんの行動、気持ちは非常に詳しく書かれているのに対し、兵十のそれは少ない。たとえあったとしても、それはごんに対する強く持続する感情のようなものではない。自分が採ったうなぎをごんに盗まれたと思っている以外、兵十はごんのことをほとんど知らないからである。そのために、読者はごんの視点から作品を読むことになり、兵十の視点に立つことが難しくなる。誤った読み取りを改善するためには、読みの視点について読者に説明することが有効であると考えた。具体的には、兵十の気持ちを考える時には兵十の立場から考えることが重要であること、ごんの自身の立場に立って考えることはいけないことを説明する。このような説明を行った上で作品を読ませることが誤った読み取りの修正に取って有効であろう。この仮説を検証するために実験授業を行う。

### 方 法

【対象者】茨城県内の私立I大学生17人。

【手続き】手続きは実験1とほぼ同様。異なる点は視点について説明した読み物の提示と解釈課題の内容である。読み物を資料1に、解釈課題を表8に示す。まず、実験1と同様



表8 解釈課題

- 問1 ここまでの説明(資料1参照)を読んで納得できましたか。当てはまる記号に○をつけてください。ウ、エを選んだ人は理由を書いてください。
- ア. 非常に納得できる      イ. 割合納得できる      ウ. あまり納得できない  
エ. 全く納得できない
- くりを持って来たのが、うなぎを取ったごんぎつねだとわかった最後の場面で、「なぜごんぎつねがくりを持って来たのか」と兵十は考えたのでしょうか。もし、考えたとしたらどのようなことを考えたでしょうか。この問題を考えてみます。
- 兵十が知っていることをもう一度書いてみましょう。
- うなぎをごんぎつねに取られたこと  
母親が亡くなった後、くりやまつたけが家のところに置いてあったこと  
鉄砲で撃ったごんぎつねがくりを持って来たこととわかったこと
- 兵十はこの事実からしか考えることができないはずです。兵十が知っていること、そこから容易に推測できることだけを考えて、以下の問に答えてください。
- 次のページを開けないでここで待っていてください。(以上2頁)
- 問2 『ごんぎつね』の最後の場面に次のような記述があります。この、最後の場面について質問に答えてください。
- 兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目に付きました。「おや。」と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。
- 2枚目2段7行目～20行目をご覧ください。下のような記述がなされています。
- その晩、ごんは、穴の中で考えました。兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきり網を持ち出したんだ。ところが、おれがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おっかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった。
- (1) 下線を引いた文章は、ごんが穴の中で考えたことです。ごんがこのように考えたことを、物語の最後の場面で兵十は知ることができたでしょうか。当てはまる記号に○をつけてください。またア、イ、ウを選んだ人は、選んだ理由をできるだけ詳しく書いてください。
- ア. 兵十は知ることができた  
イ. 兵十は知ることではできなかったが、推測することはできた。  
ウ. 知ることも推測することもできなかった。  
エ. その他( )  
オ. わからない
- 次のページを開けないでここで待っていてください。(以上3頁)
- (2) 自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかったとごんは思っています。その償いのために、ごんは兵十のところにいろいろなものを持って行きます。(P.2, 2段後ろから5行目参照)
- ごんがくりを持ってきたのは、何かの償いだと最後の場面で兵十は考えたでしょうか。それとも考えなかったでしょうか。当てはまる記号に○をつけて下さい。
- ア. 考えたと思う      イ. 考えなかったと思う      ウ. わからない
- (3) ア「考えた」を選んだ人はお答え下さい。何の償いだと考えたでしょうか。
- もっとも適切だと思う記号に○をつけて下さい。その他の意見のある人はエに書いて下さい。
- ア. 「兵十の母親にうなぎを食べさせられなかったこと」への償いだと考えたと思う。  
イ. 「うなぎを取ったこと」に対する償いだと考えたと思う。  
ウ. 日頃のいたずらに対する償いだと考えたと思う。  
エ. その他( )  
オ. わからない
- 次のページを開けないでここで待っていてください。(以上4頁)
- 問3 『ごんぎつね』の最後の場面に次のような記述があります。この、最後の場面について次の質問に答えてください。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが、目に付きました。「おや。」と、兵十はびっくりして、ごんに目を落としました。「ごん、お前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

- (1) 自分のいたずらのために兵十は母親にうなぎを食べさせられなかったとごんは思っています。その償いのために、ごんは兵十のところにいろいろなものを持って行きます。  
くりを持って来た理由として、償い以外の可能性を最後の場面で兵十は考えたでしょうか。  
それとも考えなかったでしょうか。当てはまる記号に○をつけて下さい。
- ア. 考えたと思う      イ. 考えなかったと思う      ウ. わからない
- (2) ア「考えた」を選んだ人はお答え下さい。  
どのような可能性を考えたでしょうか。当てはまる記号すべてに○をつけて下さい。その他の意見のある人はウに書いて下さい。
- ア. 「自分が一人になったのでかわいそうだと思って、ごんはくりを持って来たのではないだろうか」と兵十は考えたと思う。  
イ. 「自分と友だちになりたかったからくりを持って来たのではないだろうか」と考えたと思う。  
ウ. ア、イ以外の理由を考えた。  
エ. わからない

(以上5頁)

に作品を1回通読する。その後、気持ちの伝わり質問（事前テスト、表1）、読み物の通読、解釈課題への解答、解釈課題の解答発表と話し合い、再度気持ちの伝わり質問（事後テスト、表1）という順に実施する。なお、解釈課題の実施手続きは実験1と異なり、1頁ずつ解答した後、解答の発表と話し合いを行った（頁は資料1および表8に記載）。

## 結果と考察

まず、解釈課題の結果をしてみる（表9）。

問1の読み物の説明を納得できたかどうかについて言えば、全員がアもしくはイを選び、納得できると答えている。

問2(1)では、「兵十はおっかあにうなぎを食べさせることができなかった。（中略）ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。（以下略）」というごんが穴の中で考えたことについて、物語の最後の場面で兵十は知ることができたかを質問をしている。アを選択し知ることができたと答えた者は1名、イを選択し知ることができなかったが推測することはできたと答えた者は11名、ウを選択し知ることも推測することもできなかったと答えた者は3名であった。表13に示したように、知ることができた

表9 解釈課題：問1～3の結果

	ア	イ	ウ	エ	オ
問1	4	13	0	0	—
問2(1)	1	11	3	0	2
(2)	9	6	2	—	—
(3)	3	4	1	1	1
問3(1)	7	6	4	—	—
(2)	3	2	3	0	—

—は該当する選択肢のない項目



と答えた1名は、「ごんお前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」というセリフから知ることができたとその理由を書いている。また、知ることができなかったが推測できたと答えた者は、その大部分が「うなぎをとったのはごんであること」、「くりを持ってくるようになったのは、母親が死んでからであること」、「ごんがくりをもってきたこと」を結びつけて考えると推測できるとしている。

問2(2)は、「ごんがくりを持ってきたのは、何かの償いだと最後の場面で兵十は考えたか」という質問である。アを選択し考えたと答えた者が9名、イを選択し考えなかったと答えた者が6名であった。この問2(2)の結果と、事後テスト問1(2)の「ごんのくりを持って行って償いたいという気持ちが伝わったか」という質問のクロス集計を実験1と同様に行った(表12)。その結果、問2(2)で「考えた」と答えた9名のうち3名のみが伝わったと答えている。この結果は実験1とは異なっており、考えたとしても伝わると答えるわけではないことを示している。償い＝母親に食べさせられなかったことへの償い、とは考えていないことを意味している。この区別をすることができたのは資料を読んで、ごんの視点と兵十の視点を区別することができたことと関連するかもしれない。しかし、人数が少ないために検証できたとは言いがたいし、どのような心理過程が生じているのか明らかでない。

問2(3)は、(2)で考えたと答えた者に何の償いだと考えたかを質問したものである。3名が「母親にうなぎを食べさせられなかったこと」に対するつぐないだと考えている。この結果は償い＝母親に食べさせられなかったことへの償いとは考えていないことを示しており、上記クロス集計結果の傾向と一致している。

問3(1)は、くりを持ってきた理由として償い以外の可能性を兵十は考えたかどうかを質問している。アを選択し考えたと答えた者が7名いた。アを選択した者に対しどのような可能性を考えたかについて(2)で質問したところ、兵十が一人になったのがかわいそうだと思った、友だちになりたかったなどの理由を選択している。他方、イを選択し考えなかったと答えた者も6名いる。

次に気持ちの伝わり質問の結果をしてみる。ここでは質問(1)、(2)の事前、事後テスト結果のみを示す(表10、表11)。実験1と同様に、事前テストから事後テストにより正しい方向への反応変化数とより誤った方向への反応変化数を計算し、サインテストを行ったところ質問(1)、(2)いずれも有意差が認められなかった。このことから仮説は検証されなかったと言える。ただし、いずれの間でもより正しい方向への反応数が誤った方向への反応数より多かった。伝わらないという選択肢を選んだ者の数について言えば、事前テスト

表10 事前・事後テスト結果 問1(1)

		事 後			合計
		伝わった	伝わらなかった	判断に迷う	
事前	伝わった	0	3	1	4
	伝わらなかった	1	10	0	11
	判断に迷う	0	1	1	2
	合 計	1	14	2	17

表11 事前・事後テスト結果 問1 (2)

		事 後			合計
		伝わった	伝わらなかった	判断に迷う	
事前	伝わった	3	3	3	9
	伝わらなかった	1	4	2	7
	判断に迷う	0	1	0	1
	合 計	4	8	5	17

表12 解釈課題：問2 (2)と事後テスト：問1 (2)の相関

		事 後 問1 (2)			合計
		伝わった	伝わらなかった	判断に迷う	
問2 (2)	考えた	3	4	2	9
	考えない	0	4	2	6
	わからない	1	0	1	2
	合 計	4	8	5	17

表13 問2 (1)の選択肢別の理由

「知ることができた」を選択した対象者の反応

・「ごんお前だったのか、いつも、くりをくれたのは。」というセリフから知ることができたと思いました。

「知ることが出来なかったが推測できた」を選択した対象者の反応

- ・兵十のおっかあは本当に「うなぎが食べたい」と言って死んじゃったわけでもないし、葬式をごんがみていることも知らないから。
- ・自分がうなぎを取りに行った理由をごんは知らないはずであるが、ごんがくりなどを持ってくるようになったのが、自分の親が死んでからだったからである。
- ・うなぎをきつねに取られたことは兵十は知っているのだから、くりを毎日おいてあったら、反省の気持ちだとわかることができるはず。
- ・兵十が知ることができなかったとしても、うなぎを取ってしまったのはごんぎつねであるから、おっかあへのつぐないのためにしていたのかと推測できたのではないかと思う。
- ・母親が死んでからくりやまつたけが運ばれてきて、いつもはいたずらばかりしているきつねがそれを運んできていたから。
- ・うなぎをとられる現場とくりを持ってきた（と思われる）現場を兵十は見たので、この2つが関連して推測することは可能ではないかと思った。
- ・うなぎを盗まれたことと、母親が死んでから毎日ごんぎつねがくりを持っていた、ということをつ結び合わせて考えれば、ごんがいたずらを後悔したこと、そのつぐないのためにくりを持って来たことは推測できる。また、そう推測したからこそ兵十は最後に火縄銃をとり落とした、と考えられる。
- ・ごんが考えたことを知ることはできないので、推測をするしかなかったから。ごんに直接聞いたわけじゃないから。
- ・うなぎを盗んだごんぎつねとくりを持って来たごんぎつねが一緒だったので（しかも母が死んだあとからくりなどをもらうようになったから）。
- ・兵十はきつねではないので、きつねの考えを全て知ることはできない。しかし、きつねがいたずらをして、その後兵十の母が亡くなってからくりとかを持ってくるようになったと知ったので、そこからごんの気持ちを推測することはできると思ったから。
- ・ごんが考えていたことだから。

「知ることも推測もできない」を選択した対象者の反応

- ・うなぎ以外にもいろんな魚を逃がした。うなぎを特定できる要素がない。
- ・いたずらをした事に対してごんが悔いているなんてわからない。
- ・本当におっかあがうなぎを食べたかったかは定かではない。もしかしたら他の魚だったかもしれないし、その時おっかあは元気だったのでは？ 気長に魚とってるぐらいだもん。

と事後テストとでほぼ同じであることがわかった。他方、伝わったという選択肢を選んだ者の数は、事前テストから事後テストにかけて、(1)では4→1、(2)では9→4に変化した。これは仮説を支持する方向の結果と言える。

### 実験 3

#### 問題と目的

読みの視点について読者に説明するという方法では、誤った読み取りが改善されたとは言いがたい。また、どのような心理で気持ちの伝わり質問に答えているのかも明らかにできなかった。実験1でも実験2でも、事前・事後テストや解釈課題は選択肢から正しいと思うものを選ぶという形式で行った。データの数量的分析を考えると適切な方法であろう。しかし、一人一人の考えていることを詳細に分析するには必ずしも十分とは言えない可能性がある。さらに、解釈課題での事実確認という方法のみによっては、誤った読み取りを修正したり、誤りの心理を明らかにしたりするには限界があるかもしれない。読者が事実にもとづく推論という方法を受け入れるかどうかは疑問だからである。そこで、実験3では事実確認とそれにもとづく推論以外の修正方法を検討する。

再度、ごんぎつねにおける誤った読み取りの心理を分析してみる。最後の場面でごんの償いの気持ちが兵十に伝わったと読者は考える。それはもし、伝わらなかったとするとごんの行為はまったくの無駄になってしまう、あまりにも悲劇的結末になってしまうと不安になるからではないだろうか。ごんが鉄砲で撃たれたとしてもごんの気持ちが伝われば、それはせめてもの救いになるだろう、と読者は感じているのかもしれない。では、逆にくりを持って行く深い理由が伝わらなかったとしたら、本当に作品の結末を受け入れることができないのだろうか。くりを持っていったのが自分であることが平十に伝われば、ごんとしてはある程度満足できるという可能性はないだろうか。それに、兵十が鉄砲でごんを撃ったのはある程度自然であったことにも思いが及べば、悲劇的結末を受け入れやすくなるだろう。つまり、ごんの兵十に対する愛とそれを引き裂くような哀しい結末を受け入れ、母親にうなぎを食べさせられなかったことについて償いの気持ちが伝わらないことも納得しやすくなるのではないかと予想した。

このような仮説を確かめることと読者の心理をより深く分析するために、半構造化面接の形式で実験授業を行う。

#### 方法

【対象者】茨城県内の私立I大学生4人。

【手続き】実験1と同様の方法で実験者が作品を読み、対象者が気持ちの伝わり質問（事前テスト、表1）に答える。その後、実験者が質問を口頭で行い学生がそれに答える。その後再度気持ちの伝わり質問を行う（事後テスト、表1）。日程の都合上、1回目は学生1名に対して実施し、2回目は3名に対し同時に行った。時間はそれぞれ40分程度であった。

#### 結果と考察

気持ちの伝わり質問の結果を表14に、面接記録の概要を表15に示す。表14からわかるように、事後テストの問1(2)においてアを選択し伝わったと答えている学生が1名いる。

表14 事前・事後テスト結果：問1 (1), (2)

対象者	(1) 事前	事後	(2) 事前	事後
1	イ	イ	ウ	イ
2	ウ	イ	ア	ア
3	イ	イ	イ	イ
4	ア	イ	ア	イ

表15 面接記録

## 対象者番号1

T ごんはですね、くりとかイワシとか持っていくますよね。なんで持っていったのかわかります？

S 自分のせいで兵十がお母さんにウナギを食べさせられなかったと思っているし、同じひとりぼっちになっちゃったから、同情じゃないですか？

T 次です。兵十の気持ちなんですけど、最後のシーンの前までに、ごんについてどう思っていたんですか。

S ごんについては、いたずらぎつねだと思っていた。

中略

T もう一つ。加助と話しているシーンですけど。なぜくれるのか理由がわからないと言っているんだよね。おれの知らないうちにおいていくんだと。そうすると、加助は神様の仕事だよといっているんだよね。それで、ごんはそれはつまらないな、俺にお礼を言わないで、と思っているわけだよね。ごんは何をわかってほしかったんだと思う。

S うーん。罪を償っていることかな。罪を償っていることをわかってほしかった。

T 罪を償っているというのは？

S うなぎの罪。

T うなぎをお母さんに食べさせられなかったという罪？それをわかってほしかったの？それとも、いたずらをしたことの償いだとわかってほしかったのか？

S ごん自体は、いままでのいたずら全部を悔いているわけじゃなくて、今回のいたずらを悔いているだけだから、どっちかというところ、償いたいという気持ちかな。

T ごんは俺にお礼をいわないでと言っているんだから、それがわかれば優しいやつだと思って満足するっていうことないの？どこまでわかってもらったら、ごんとしてはいいかなと思ったのかな？

S 自分だと気づいてほしい。他の人だとは思われないじゃないですか、ごんは。

T どこまでなのかなと気になっていて。ごんの気持ちが。持っていく理由だけど、理由のところまで入っているのか、それともくりを持っていったということ行為なのか。そこはどう思っている？

S うーん。どうなんだろうな。おれは読みながら兵十は気づくのかなと思って読んでいたんですけど。

おれがそういう気持ちになるって言うのは、ごんもそう思ったのかな。理由の方まで気づいてほしいのかって。

T 最後にうたれたけれど、くりをくれたことはわかったんだけど。ごんの思いはどうなんだろうね。

S 罪を償っていたというのは兵十には伝わっていたと思いますよ。兵十は多分このあとがあると思うと、なぜくりを持ってきたのか考えると思うんですよ。兵十とごんの接点というのは、ウナギを取ったか取られたかだけなんですよね。葬式を見ていたことも知らないし。ということは、そうするとなぜキツネがそんなことをするんだろうと考えたら、あれかと。そのときのことかと。

T あのときのことと関わってくるんじゃないかと思うということ？理由を探っていくと償いにつながるんじゃないかと。

S ウナギを取ったことを償うために持ってきたんじゃないか、ということに気づいてもおかしくはない。

T もう一つ最後の質問だけど、ウナギを取ったことの償いの気持ちを兵十は気づくかもしれない。最後にね。だけど、ごんが悪いなと思ったのは、うなぎを取ったというよりも深い思いがあるんじゃない？

S お母さんのことですね。あとは、多分兵十を一人にしちゃったことも、ごんとしてはショックだったのかな。ごんも一人きりだったじゃないですか。つまらないからいたずらをしていたということもあったかもしれない。そういう状況にしちゃったというのをごんの中に感じるものがあったかもしれない。

T 兵十はお母さんの問題まで考えることをしただろうか？それはどう思う？

S それは兵十はわからない。兵十がそもそもお母さんのためにうなぎを取っていたかどうかはわからないから。たぶん、俺としては取っていなかったと思う。だから、ごんがそこまで考えていたことに気がつかないと思う。

対象者番号2～4

T ごんがくりとかまつたけを持ってきましたよね。なぜ持ってきたのかな？  
S 自分がうなぎを取って、お母さんが死んだと思ったから。償いと思った。  
T 兵十は、ごんを撃つ前、ごんがくりを持ってくるのを見る前までに、ごんに対してどういう気持ちを持っていたと思います。  
S おかあさんのためにウナギを取っていたのに、あいつのせいで。撃つ前まではキツネの存在はあまりなかったと思う。  
T じゃ、なぜごんを撃ったの？  
S 見たとき、あのときのごんぎつねかと思ったから。  
T あのときのゴンギツネと思った時、何を思い出したの？  
S ウナギを取られたこと。  
T 取られたときの兵十の気持ちは？  
S 最高にくやしい。  
T それで、見つけて火縄銃で撃った。撃つ直前、見つけてから火縄銃で撃つまでの間の気持ちは？  
S にくらしい。  
T 火縄銃は普段なんのためににおいてあると思う？  
S お母さんを守るため。  
S 狩りとか、自分の家にイノシシなどが来たときの防衛策として。  
T 毎日くりを持ってきたのは、撃つまでじゃないよね。うなぎを盗んだことは知っているよね。なんで兵十はうなぎを盗んだごんを憎らしいと思っていたの？何がそんなに兵十を撃たせるような気持ちにさせたの？  
S またいたずらされて、部屋の中を荒らされるんじゃないかと思った。  
T ごんが穴の中で考えたことだけけど、反省しているのだけれど、おかあがうなぎを食べたいと言ったにちがいないとか、おかあに

ウナギを食べさせられなくて死んじゃったとか、というのは事実だと思う？  
S お母さんが生きているときに魚を取ったから、二人で食べようと思っていた。  
T 取って食べられなくなってしまった。その時のお母さんがウナギを食べたいといったに違いないというのは事実かな？  
S 事実じゃない。ごんが思ったこと。  
T 絶対事実だと言う人は？  
S (いない)  
T 最後の場面で、撃ったあとくりが固めておいてあるのを見つけて、お前だったのか、くりをくれたのはと言った。その前に、加助と話しているところ、俺にお礼を言わないで神様にお礼を言うのは引き合わないと言っていますよね。じゃ、ごんはどういう風にわかってほしかったのか。ここで聞きたい2つの点は、くりを持って言ったということを知ってほしかったのか、もう一つは悪いことをしたからその償いに持っていったことをわかってほしかったのかということ。3つ目は、いたずらの反省だけでなくお母さんに食べさせられなかったことで、死んじゃって悪かったなと思っている気持ちが伝わってほしい。どれだと思う？どこまで伝わってほしかったのかな。  
S 全部。  
S 持っていったのが自分だということ。  
S 最初はお母さんに食べさせられなかったことを謝りたかったけれど、最後の頃は自分がくりを持っていったこと。  
T もし全部わかってほしいとごんが思っているとしたら、兵十がそこまで理解できるだろうか、と思わない？  
S 事実ならわかるかもしれないけれど。事実かどうかわからないから。  
S そこまで思わないかもしれないけど。

T：実験者 S：大学生

伝わったと答える学生が事後テストでは1名もいなくなることを予想したがそのような結果は得られなかった。

面接記録について分析する。対象者番号1の学生は「罪を償っていたというのは平十には伝わっていたと思いますよ。平十は多分このあとがあるとすると、なぜ栗を持ってきたのか考えると思うんですよ。平十とごんの接点というのは、うなぎを採ったか採られたかだけなんですよ。」と発言している(下線部参照)。うなぎを取ったことの償いという気持ちは兵十に伝わった、と考えていることがこの記述からわかる。ただ、母親に食べさせられなかったのをごんが後悔していることは、兵十に伝わったとは思わないとその学生は言っている。そもそもそれが事実であるかどうかはわからないから、というのがその理由である。ただ、長い話し合いの結果そのような結論に達したことを考えると、罪を償うというのはいたずらの償いなのか、うなぎを取った償いなのか、うなぎを取ったために母親

にうなぎを食べさせられなかったことへの償いなのかを区別することが容易にできたとはいいがたい（下線部参照）。

対象者番号2～4の学生の面接記録を見ると、兵十に伝わってほしいごんの気持ちは何かという質問に対し、3人の学生はそれぞれ違う答えをしている（下線部参照）。ある学生は母親にうなぎを食べさせられなかったことをはじめは謝りたかったけれど、最後の頃は自分がくりを持っていったことであると答えている。最後まで、母親にうなぎを食べさせられなかったことへの償いの気持ちが伝わってほしいとごんが考えていると答える学生はいない。その点で、面接はある程度順調に進んでいるように思える。

しかし、2～4の学生の事後テストを見ると、対象者2番の学生は問1(2)について「伝わった」と答えている。その理由は授業記録からはわからない。

### 全体考察

実験1から実験3までを通して結果を考察したい。いずれの実験においても、伝わったと答える学生数は事前テストから事後テストにかけて減少している。しかし、伝わらなかったと答える者が事後テストにおいて大きく増加しているわけではない。母親にうなぎを食べさせられなかったことに対して、「くりを持って行って償いたいというごんの気持ちが伝わった」と答える者が、実験1の事後テストでは16名中7名、実験2では17名中4名も存在している。

さまざまな読み取りの修正法によっても誤った読み取りが改善されないのはいったいなぜだろうか。実験3の対象者1の反応からもわかるように、いたずらの償いであることは、「うなぎを取ったこと」と「くりを持ってきたこと」ことを結びつけば理解可能であると発言している。また、実験2の結果と考察でも指摘したように、ごんが穴の中で考えたことを推測できたとする者は、「うなぎをとったのはごんであること」、「くりを持ってくるようになったのは、母親が死んでからであること」、「ごんがくりをもってきたこと」を結びつけて考えれば推測できるとしている。このように、兵十がごんの気持ちを理解する力を読者は非常に大きく捉えている。文章中の事実と推論から文章を読み取るとするならば、兵十がごんの償いの気持ちをすべて知ることは不可能に近い。しかし、読者である一部の学生はそれが可能だと思っているのである。

いったいどのような心理過程でそのような反応が生じるのであろうか。ここでは2つの可能性を指摘したい。

まず読者はごんに対する共感が強いと予想される。ごんの気持ちが伝わってほしいと強く思っているだろう。その感情に強く影響されて、まず「伝わった」と結論するのではないだろうか。その過程は論理的というよりも直感的、感情的なものと推測する。そのあと、伝わった理由を探ることになる。ごんがくりを持ってきた、母親が死んでからくりを持ってきた、うなぎを母親に食べさせようとしたのだろう、というような判断から伝わったと結論づけるのではないだろうか。たしかにこれらの事実は伝わったとすることとまったく矛盾しない。伝わらなかったという結論を考え、その可能性を検討するということはそもそも行わないのではないだろうか。このような心理過程に支えられていると考える。

第2は、事実で確認出来ることと推測にとどまることを区別せずに、推測できることが



事実であるかのように考えて解釈するという心理過程である。ごんが穴の中で考えたことは、あくまでごんの思いであってそれが事実であるとは限らない。母親がうなぎを食べたと言ったとか、うなぎを食べないまま死んでしまった、というのは事実かもしれないが事実でないかもしれない。さらに、ごんがそのように考えていることを兵十が知るのは、論理的可能性としてはあり得るかもしれないが、それは兵十の直感や想像力を過大に評価しない限り難しい。しかし、読者はこのような分析をせずに読み取る。大学入学までの国語の授業において、分析的に読み取ることの経験をせず、分析的に読み取るための原則・規則を学習してこなかった可能性が高い。このような学習をしていない学生に対し事実確認の必要性を指摘したとしても、それは受け入れることが難しいのではないだろうか。

以上のような心理過程によって誤った読み取りが生じているのではないかと考える。ただし、そのような分析的・論理的読み取りによって誤った読み取りが修正可能なのか、それともそのような読み取りとは異なる感情的・直感的読み取りという心理過程が存在しており、それをなくすことは原理的に難しいのかについては現在の時点ではわからない。これについては今後の課題としたい。

## 引用文献

- 麻柄啓一 1994 文学作品の読み誤りとその修正について 読書科学 38-1, 5-12.  
立木徹 1992 文学作品における“結果論的受けとめ”について 読書科学 36, 1-10.  
立木徹・伏見陽児 2003 文学作品の誤った読み取りとその修正 読書科学 47-2, 50-59.  
立木徹・伏見陽児 2004 文学作品の誤った読み取りの修正に及ぼす「事実確認」質問と「証拠指摘」質問の有効性 茨城キリスト教大学紀要 38, 159-173.

## Correcting the Misreading of a Literary Work

Toru Tatsuki and Yohji Fushimi

Nankichi Niimi's literary masterpiece, *Gongitsune*, serves as standard educational material for teaching Japanese in many Japanese primary schools. The protagonist is a little fox named Gon who lives on the outskirts of a village and plays pranks on the villagers. One day Gon releases fish from a net set by Hyoju, a villager, and steals Hyoju's eels. After Hyoju's mother passes away, Gon realizes Hyoju caught the eels for his ailing mother and regrets stealing the eels. He then returns under cover to Hyoju's house with chestnuts and mushrooms in order to atone for his misdeed. When Gon sneaks into Hyoju's house, Hyoju misunderstands Gon's intent and shoots him. Finding the chestnuts soon after, Hyoju realizes Gon's gifts were for him. The narrative closes with Hyoju exclaiming, "Gon, was it you who always brought chestnuts for me?"

Some readers think that Hyoju understands Gon's intention of compensation for depriving Hyoju's mother of the eels. Read properly, Hyoju clearly does not understand Gon's intention and feelings and the misunderstanding occurs.

Tatsuki & Fushimi (2003, 2004) conducted three experiments to reconfirm the erroneous interpretation of university students and attempt to correct the misinterpretation. Results suggested, however, that the subjects' erroneous interpretation of *Gongitsune* did not improve and was not corrected.

The purpose of this study was to attempt again to correct the misinterpretation, and the authors conducted three experiments. In Experiment 1, the student subjects presented and discussed their opinions. In Experiment 2, the authors explained that Hyoju's perspective differed from that of Gon. In Experiment 3, the investigators interviewed the subjects in a semi-structured method.

The results suggested that the subjects still thought that Hyoju understood Gon's compensatory intention. The subjects' erroneous interpretation of *Gongitsune* did not improve and was not corrected.

The authors determined the subjects' misreading of the text was the result of readers' intuitive, sentimental reading and confusing the facts with their inferences.

資料1 読み物

文学作品を読むときにはどの視点で書かれているかに注意しなくてはなりません。『ごんぎつね』の場合には、「これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です」という形で、「わたし」という書き手の視点で文章が記述されています。この場合、書き手はごんのことについても兵十のことについても知っていて、それぞれの気持ちや行動を文章にしているのです。それを読む私たちも、書き手の視点で読むことになるので、ごんと兵十のことを同時に知ることができます。

では、ごんや兵十はどうでしょうか。ごんは兵十のすべてを知ることができるわけではありません。同様に、兵十もごんのすべてを知ることができるわけではないのです。たとえば、ごんがどのような所に住んでいるのか、兵十は知ることができるわけではないのです。ごんも、兵十が魚やうなぎを入れたびくを置いて、川上の方にいった理由は知らないのです。

この物語を読むことの難しさは、私たちはごんと兵十のことを同時に知ることが出来るのに対し、ごん、兵十はそれが出来ないという点にあるのです。そこで、ここでは兵十が知っていることを作品の中から取り出して、その内容を要約してみたいと思います。

川でうなぎを取っているときにごんぎつねにうなぎを取られてしまったこと  
自分の母親が亡くなって葬式をしたこと  
ひとりで米をといたこと  
魚屋に殴られたこと  
家のところにくりやまつたけが置いてあったこと  
加助が言ったこと  
きつねが家の中に入ってきたこと  
きつねを鉄砲で撃ったこと  
土間にくりが置いてあったこと  
くりを持って来たのはごんぎつねだと知ったこと

以上のことをさらにまとめると次のようになります。

うなぎをごんぎつねに取られたこと  
母親が亡くなった後、くりやまつたけが家のところに置いてあったこと  
鉄砲で撃ったごんぎつねがくりを持って来たことがわかったこと

(以上1頁)

兵十が知っているのはこれらのことだけです。作品の大部分はごんが見たこと、気持ち、行動を記述していますが、兵十はその大部分を知らないのです。

兵十の気持ちを考える時には、兵十の立場だけで考えることが大切です。というのは、兵十がまったく知らないことは考えることができないからです。たとえば、ごんのいたずらすべてを知っているわけではありません。もちろん、推測はできます。うなぎを盗んだのだから、ほかのいたずらもしたのではと考えることは可能です。しかし、推測するにも限界があって、どのようなことも推測できるわけではありません。

「ごんは朝寝坊の傾向があるので昼や夜にいたずらをした（これが正しいわけではありません）」、「ごんには兄弟のきつねがいた（これは間違っています）」などと兵十が推測していた、と考えるのは非常に難しいことです。ごんがどのように暮らしているかを兵十は知ることができないし、考えるための手がかりがほとんどないからです。

ごんの気持ちを知っている作者の立場、ごんと兵十の気持ちを知っている読者の立場、それからごん自身の立場で考えてはいけません。

(表8に続く)